

平成19年度 読書感想文コンクール

角館図書館後援会主催の平成19年度読書感想文コンクールが行われ、小・中学校の部合わせて90点の応募がありました。その中から小柳萌さん(西長野小4年)の「障害もひとつの個性」が最優秀賞に選ばれました。入賞者と最優秀賞の作品を紹介します。

読書感想文コンクール審査結果 (敬称略)

最優秀賞 小柳 萌(西長野小4年)

優秀賞 木元 聖(白岩小2年)

優秀賞 佐藤葉月(角館中2年)

小学校下学年の部

入選 佐々木唯衣(角館東小1年)・雲雀裕稀(白岩小2年)

佳作 佐々木菜祐(中川小1年)・戸澤梨華(中川小2年)

館岡 陸(西長野小1年)・佐藤 好(角館東小1年)

青山英恵(角館西小3年)

中学校の部

入選 館岡早貴(角館中1年)

田村優美(角館中2年)

佳作 中嶋奏絵(角館中1年)

高倉由布(角館中2年)

小松亜里紗(角館中2年)

小学校上学年の部

入選 館岡里紗(西長野小5年)・阿部志緒里(角館西小6年)

佳作 高橋あやか(白岩小4年)・鎌田日花理(角館西小5年)

己野莉沙(角館西小5年)

最優秀賞作品

『障害もひとつの個性』

(図書:「車いすからこんにちは」)



こやなぎ もえ
小柳 萌

私の弟は病気で、みんなみたいに言葉を上手に話せません。このことがうすうすわかったのは、保育園の年頃くらいの時でした。ずっと私は、みんなと同じことをできなくてかわいそうと思っていました。でも、私は今その病気になった弟をかわいそうなど思っていません。だってそれが弟の個性だからです。それがわかったのは、内海さんの言葉でした。

『障害もそうした個性のひとつ』

私はその言葉に感動しました。だって、私が今まで考えたことのない事だったからです。内海さんは、脳性まひで、生まれつき手足が不自由な人です。そういう障害を持った人だから言える言葉だと思うからです。

弟は今、大曲養老学校の小学1年生です。内海さんもゆかり園にお母さん達とはなれて、訓練や勉強をしてたんですね。友達もできてきっと楽しかったと思います。でもそんなくらしも続きませんでした。4年生をおえたあと、ちょうど私達と同じ年ごろです。ゆかり園にいられなくなってしまいました。そして、5、6年生の2年間を家ですごして、勉強も家でやったそうですね。夕方になると、元気な小学生が公園で遊んでいるのを、内海さんはいつもまどから見ていました。私はそれが、内海さんにとってつらくて、くやしいことだと思いました。だって、どんなにサッカーや野球がしたくても、足がわるくて、速く走れないからです。きっと内海さんは、「みんなといっしょに楽しく外で遊びたい。」とってたと思います。

内海さんが大人になって、気づいたのは、「障害者なんだからがまん。」とか、「しかたがない。」など、差別されていることです。私はまじかに、障害を持っている弟がいるから差別をするいみがわかりません。みんな同じ人間なんだから、同じように接したらいいと思います。障害を持っていない人は、きっと、「障害者が弱い人間」「じゃまな人間」と思ってる人がいたかもしれません。内海さんは、そんなふうには思わないように、自分から、話しかけたり、えらいと思いました。

私は弟の姉で良かったです。だってきっと弟がいなかったら、障害を持っている人に話そうと思わなかったし、こんなふうと同じ人だから差別するなんておかしいと強く思わなかったでしょう。弟がいたから内海さんのように病気の人にも接することができます。私がこの本を読んでわかったのは、「障害も自分の個性」ということです。そうですね。障害があってもその自分なんだから。弟だってそれが自分の個性ですもんね。だから内海さんのように生きていってほしいと思います。

私は、今まで以上に、弟のことをかわいく大事に思えるようになりました。いつか私だって、内海さんみたいに、交通事故にあたりして障害者になることがあるかもしれません。でも、それも「私の個性」と考え、あきらめずにいたいんです。